

カリキュラム・マネジメントを活用した学校づくりの支援

企画研究部 研究主事兼指導主事 森 山 隆 仁

要約

新学習指導要領のキーワードの一つ「カリキュラム・マネジメント」。しかし、学校現場においては十分に必要性が理解されておらず、実践につながっていない場合も多く見られる。

そうした現状のなか「カリキュラム・マネジメントを活用した学校づくりの支援」について平成 30・31 年度全教連課題研究の指定を受け、研究を進めた。出前講座「カリキュラム・マネジメント講座」での知見から、カリキュラム・マネジメントの課題について検討するとともに、各学校におけるカリキュラム・マネジメントの実現を支援するワークシート及びハンドブックを作成した。

本稿ではカリキュラム・マネジメントの課題とワークシート及びハンドブックの概要について示すことを目的としている。

キーワード：学校づくり、カリキュラム・マネジメント、学びの連続性、ワークシート

1 研究課題設定の背景

新学習指導要領で重要なキーワードの一つとして「カリキュラム・マネジメント」が挙げられる。文部科学省『新学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ—』における「学習指導要領改訂の方向性」の中でも「新しい時代に必要となる資質・能力の育成と、学習評価の充実（何ができるようになるか）」、「新しい時代に必要となる資質・能力を踏まえた教科・科目等の新設や目標・内容の見直し（何を学ぶか）」、『主体的・対話的で深い学び【アクティブ・ラーニング】』の視点からの学習過程の改善（どのように学ぶか）」という大きな 3 つの柱をつなぐ位置に「各学校における『カリキュラム・マネジメント』の実現」が記載されていることからその重要性は明らかである。（図 1）

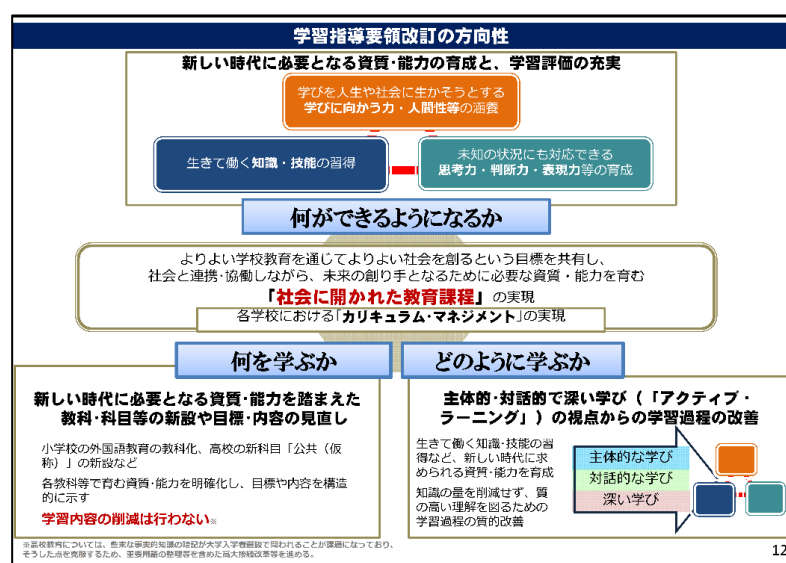


図 1. 「学習指導要領改訂の方向性」

（出典：文部科学省「新学習指導要領の考え方—中央教育審議会における議論から改訂そして実施へ—」）

しかしながら、全国学力学習状況調査における学校質問紙の結果からもカリキュラム・マネジメントの実施状況が京都府は全国平均を下回っており、各学校におけるカリキュラム・マネジメント実現の支援が急務となっている。（図2）

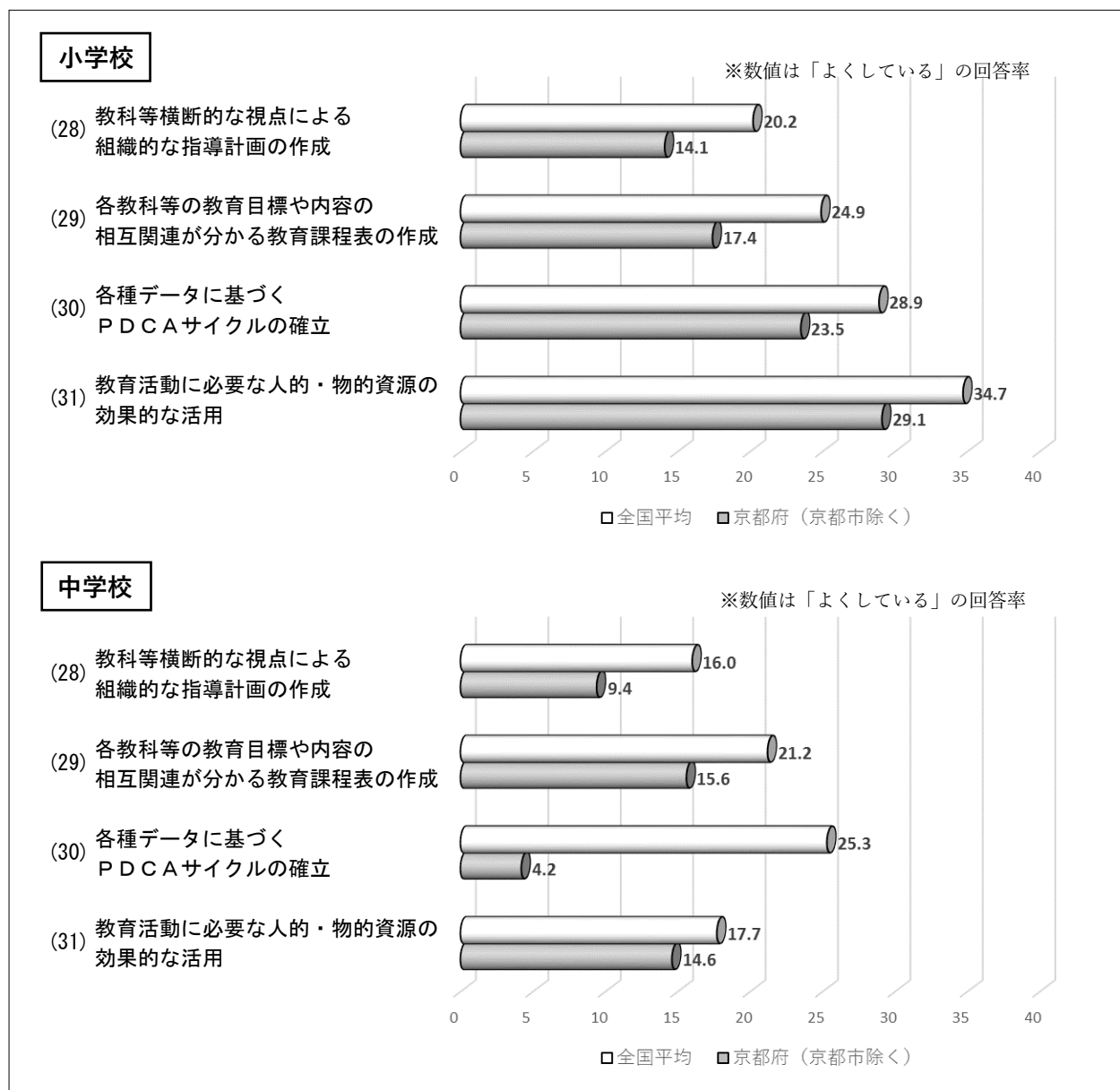


図2. カリキュラム・マネジメント実施状況（平成29年全国学力・学習状況調査 学校質問紙）

急激に変化する社会に対応した「社会に開かれた教育課程」を実現するためには、地域社会との協働や自校の課題の視点から、教育課程を常に見直し、更新するカリキュラム・マネジメントの機能は必要不可欠である。にもかかわらず、実際にカリキュラム・マネジメントが機能しにくい現状となっている。それはなぜなのか。その要因を出前講座「カリキュラム・マネジメント講座」の実施前に聴取した講座内容の希望から明らかにし、その課題を解決し、各学校におけるカリキュラム・マネジメント実現を支援するためのワークシート、ハンドブックの作成を本研究の主題とした。

2 研究の意義・目的

カリキュラム・マネジメントについては様々な実践や研究が展開されているが、その多くは学校経営やカリキュラム編成に関わるものであり、各学校においても様々な資料や書類が作成されている。しかし、それらを授業づくりや学級づくりにつなげるものは比較的少なく、「紙づくりのためのカリキュラム・マネジメント」に陥る事例もあることから、カリキュラム・マネジメントの視点を一人一人の実践に活用するための支援が必要である。

そこで本研究においては、平成30年度に新設した京都府総合教育センター出前講座「カリキュラム・マネジメント講座」の実施を通して、各学校等におけるカリキュラム・マネジメント実現の課題を調査し、それに基づいて「思考ツールとしてのワークシート」を研究・開発し、各学校における支援に取り組むこととした。また、より高い波及効果が得られるよう、研究成果をまとめたハンドブックを作成し、発信することとした。

なお、本研究では特別に研究指定校を設定しない。そのことにより、より幅広くカリキュラム・マネジメント実現の課題について調査が可能となり、「どの学校でも活用できるワークシート」の開発につながると考えられるからである。

本研究によって学校教育目標の実現のため、教科等を横断的な視点でつないだ、より教育効果の高い授業づくり・学級づくりの実践が展開され、カリキュラム・マネジメントを活用した学校づくりが推進されることが期待できる。

3 研究の成果

(1) カリキュラム・マネジメントの課題に関する調査

京都府総合教育センターでは、研究主事が教育局や市町（組合）教育委員会、各学校等に赴いて研修講座を実施する「出前講座」を平成20年度から本格実施している。平成29年度の受講者数は延べ人数で4,600人を超え、当センターにおいて大きな取組の一つとなっている。

平成30年5月から受付を開始した出前講座「カリキュラム・マネジメント講座」には、年間で12件の申し込みがあり、延べ500人を超える受講者を対象に実施した。実施初年度の平成30年度はそれぞれのニーズに合わせた内容で実施することで高い満足度を得ている。（図3）

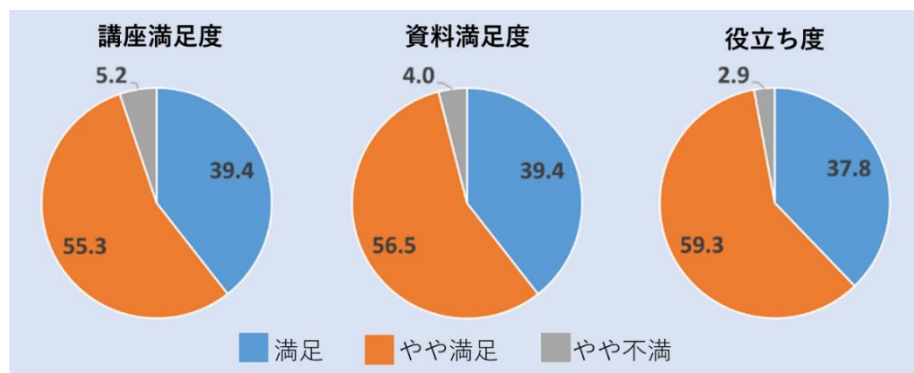


図3. 平成30年度出前講座「カリキュラム・マネジメント講座」アンケート結果

先述のように京都府においては、カリキュラム・マネジメントがうまく機能していない現状がある。そこで、各学校や教育委員会がカリキュラム・マネジメントの実現において、どのような部分に困り感を感じているかを把握し、課題を明確にするため、出前講座「カリキュラム・マネジメント講座」の実施前に聴取した希望テーマを整理した。（表1）

	実施形態	申込 人数	希望テーマ
1	教育局指導主事研修会	20	カリキュラム・マネジメントの概要
2	小学校校内研修会	12	総合的な学習を軸にしたカリキュラム・マネジメントの実現について
3	小学校校内研修会	23	行事、総合的な学習を軸に展開するカリキュラム・マネジメント
4	教育局中堅教員研修会	14	カリキュラム・マネジメントを生かした学校づくり
5	幼保小中合同研修会	60	幼保小中をつなぐ系統的なスキルの育成
6	小中合同研修会	60	小中連携を推進するカリキュラム・マネジメント
7	小中合同研修会	30	地域とつながる総合的な学習とカリキュラム・マネジメント
8	高等学校校内研修会	30	新しい学習指導要領の方向性とカリキュラム・マネジメント
9	高等学校校内研修会	9	カリキュラム・マネジメントの概要と学校づくり
10	中学校校内研修会	15	カリキュラム・マネジメントを生かした集団づくり
11	教育局事務職員研修会	130	チーム学校の実現とカリキュラム・マネジメント
12	教育局教務主任研修会	120	カリキュラム・マネジメントの必要性
	合計	523	※京都府においては教育事務所を教育局とする。

表 1. 平成 30 年度出前講座「カリキュラム・マネジメント講座」希望テーマ一覧

表 1 に見られるように依頼のあった研修会は多様であるため、希望テーマも非常に幅広いものであった。小中学校の合同研修会が多いなど、属性にやや偏りはあるものの、校種等を限定しないことで、できるだけ正確に学校現場の要望を抽出できたものとする。そして、それらの要望がカリキュラム・マネジメント実現の課題であると考え、以下のように整理を試みた。

ア	小学校の課題	学校行事のイベント化
イ	中学校の課題	教科等横断的な学習活動の編成
ウ	高等学校の課題	教科等横断的な学習活動の編成 新学習指導要領への対応
エ	校種間連携の課題	目標の共通理解
オ	ミドルリーダー層の課題	学校づくりの視点への転換
カ	事務職員の課題	学習指導要領など、教育活動全般に関する理解

多様な体験活動を展開する小学校では「ねらい」が薄れてしまい、教科担任制の中学校、高等学校ではいわゆる「教科の壁」が課題となっているなど、校種ごとの傾向が見て取れる。データ数が少ないため、統計処理を行い、量的に分析することは不可能であるが、質的に見たとき、これらの課題は単に「カリキュラム・マネジメント実現の課題」ととどまらず、「学校づくりにおける課題」そのものであると言える。また、どの研修会においても要請機関が「管理職だけでなく、全教職員が自分事として意識するためにはどうしたらよいか」、「必要性をいかに伝えるか」ということに苦心していることが明らかになった。

これらの課題の中から、特に重要であると考えられる 3 つの課題に焦点化し、その解決について考えるとともに、ワークシート、ハンドブックの作成に取り組んだ。

(2) カリキュラム・マネジメントの課題と考察

①「なぜカリキュラム・マネジメントが必要なのか」という必要性の理解

まず、最も重要なのが「カリキュラム・マネジメントの必要性」についての理解である。学校のグランドデザインや教育課程の編成を担う管理職等は一定の理解があるが、一般の教職員には十分な理解が得られていないのが現状である。「学習指導要領にこのように書かれているから」という説明では必要性は伝わらない。カリキュラム・マネジメントの概要について示しつつ、それぞれの教職員が授業づくりや学級づくり等において直面する課題を挙げ、その解決の方法としてカリキュラム・マネジメントがどのように有効であるかを示す必要がある。

出前講座の希望テーマからその課題を読み解くと「学びの連続性」というキーワードが浮かび上がってくる。教科と行事や総合的な学習の時間等の授業の学びをいかにつなぐか。既習事項を教科の内外を問わず活用できるようにするためには、何が必要なのか。ワークシートにはそれらの視点が授業づくりや学級づくりに自然につながるための工夫が求められる。また、ヒントとなるいくつかの実践をハンドブックで紹介することも効果的であると考えた。

個々の要請機関の現状に寄り添う視点とともに、急激に変化する社会に対応した「社会に開かれた教育課程」の理念についても具体的な説明が必要であろう。普遍的な視点から必要性を示した上で、問題解決能力、論理的思考力といった汎用的な資質・能力やE S D（持続可能な開発のための教育）などの国際的な概念について述べることで、より先を見据えたカリキュラム・マネジメントの実現が期待できる。

②「学校教育目標」と授業づくり・学級づくりとの接続

カリキュラム・マネジメントは「学校教育目標を実現するため、教育課程を編成・実施・改善する営み」である。しかしながら、実際には多くの実践の中で学校教育目標が意識されないまま、膨大な書類の作成や、やること自体が目的化した「教科横断的な学習活動」、「内外の資源の活用」が先行し、カリキュラム・マネジメントが形骸化してしまうという課題が指摘されている。

こうした課題が見られるのは「学校教育目標が実態を反映したものになっていない」、「学校教育目標と教科・領域の内容がつながらない」ことが要因であると考えられる。一般的に日本の学校における学校教育目標はスローガンとしての役割が大きく、抽象性の高いものとなっている。知・徳・体の3項目をベースに、地域との協働や環境教育、人権教育などの学校の特色が+αとして加えられるものが多い。もちろん、そこには学校の歴史や地域の期待など、学校が担うものがあるため、否定するものではないが、そうして掲げられた学校教育目標は目の前の児童生徒の実態と必ずしも一致するとは限らない。その不一致があるため、学校教育目標と授業づくり、学級づくりの実践がつながらず、カリキュラム・マネジメントが形骸化してしまうのである。

そこで、ワークシートにはカリキュラム・マネジメントの重要な起点となる「目標の設定」に焦点を当てた内容が必要であると考えた。カリキュラム・マネジメントにおける教育課程の実施・評価・改善サイクルの中で、ゴールイメージの共有を図る「目標の設定」は最も重要な取組であると言える。教職員一人一人が児童生徒の「強み」と「課題」を挙げ、学校教育目標と照らし合わせた重点目標「育てたい力」を検討する。それを学校全体で共有し、グランドデザインやカリキュラムの編成に活用する。そうすることで学校教育目標と授業づくり・学級づくりをつなぐことができると考えた。

内容としては学校の内外環境を「強み」と「課題」の視点で分析するSWOT分析に近いものがあるが、若手教職員にとって学校の外部環境を十分に把握することは困難であるため、内部環境に限定したシンプルなワークシートであることが望ましい。また、それぞれの学校文化の中で重視されている文言が異なるため、学校の実態に応じてアレンジできる形態で作成するとともに、教科や分掌、学年など様々な場面で活用できる汎用性の高いワークシートとなるよう工夫が必要である。

③「カリキュラム・マネジメントは管理職の業務」という根強い意識

中央教育審議会の論点整理では「管理職のみならず全ての教職員がその必要性を理解し、日々の授業等についても、教育課程全体の中での位置付けを意識しながら取り組む必要がある」とされている。しかし、「マネジメント」という言葉に対して抵抗感を持つ教職員が多いのが現実である。

これまで述べてきた①②において、カリキュラム・マネジメントは授業づくりや学級づくりにとって重要な視点であり、全ての教職員で取り組む営みであることはある程度伝わると考えられる。しかし、カリキュラム・マネジメントを「自分事」として、実際に授業づくりや学級づくりに活用するためには、単元構想や1時間単位での授業づくりを支援する内容のワークシートが必要である。

また、カリキュラム・マネジメントのもう一つの目的である「児童生徒が主体者として、自ら学びをマネジメントする力の育成」についても実践を紹介する。「教える側」の営みとして語られるカリキュラム・マネジメントを「学ぶ側」の営みとしても捉えることで、新学習指導要領で述べられている「変化の激しい社会」を生き抜くために必要な「主体的に学ぶ力」の育成へと通じていることが、全ての教職員に共通理解されることが期待される。

(3) ワークシートの作成

①方向性

「(2) カリキュラム・マネジメントの課題と考察」で述べた3つの課題に対応したものであり、かつ、校内研修や日々の実践の構想に活用しやすい内容のものとなるよう、以下の方向性でワークシートの作成に着手した。

- ・ 学校教育目標と授業づくりや学級づくりのつながりを支援する内容
- ・ 様々な教育活動をつなぎ「学びの連続性」を高める内容
- ・ 全ての教職員がカリキュラム・マネジメントを「自分事」として共通理解できる内容
- ・ 「思考ツール」として、様々な場面で柔軟に活用できる内容
- ・ 各学校の実態に合わせてアレンジしやすい、シンプルな内容

また、作成したワークシートを出前講座「カリキュラム・マネジメント講座」及び京都府総合教育センター研修講座「カリキュラム・マネジメント入門講座」（令和元年6月21日実施：講師 奈良教育大学 赤沢 早人 教授）の演習で活用し、その効果を確認するとともに、受講者の意見を取り入れて、さらなる工夫・改善を図った。ここではその中から2枚のワークシートと、それを用いた演習の成果について述べることにする。

②ワークシートとその活用

ア ワークシート「みんなで考えよう『育てたい力』」～実態把握と共有を目標設定につなげる～

出前講座「カリキュラム・マネジメント講座」において、必ず実施している「目標の設定」演習のために作成したワークシートである。(図4)

教職員一人一人が児童生徒の「強み」と「課題」を挙げ、学校教育目標と照らし合わせて重点目標となる「育てたい力」を検討する。そして、学年ごとや教科ごとのグループで交流し、まとめた内容を発表、共有する演習である。

1つ目のポイントは「グループでワークシートを完成させる」という視点で演習に取り組むことである。限られた研修時間の中でスムーズに演習を進めるためには、ワークシートの記入よりもグループ内での交流、まとめに重点を置く構成にした。出前講座ではワークシートの記入に10分、グループでの交流、まとめに20分、全体での共有に10分の合計40分程度の演習で効果的に目標設定を行うことができた。

2つ目のポイントは「学校の実態に合わせてアレンジする」ことである。学校の実態に合わせて「学校教育目標」を「研究主題」、「育てたい力」を「重点目標」とアレンジすることで、それぞれの学校が持つ独自の文化に根差した取組にできると考えた。カリキュラム・マネジメントが新しい取組ではなく、それぞれの学校が築いてきた実践の成果を発展させる営みであることを意識づけることができた。

3つ目のポイントは「取り組みやすく工夫する」ことである。当初は「地域の期待」などの要素もワークシート内に取り入れていた。しかし、そうした要素は若手教職員にとって難解なイメージにつながってしまうことが時折見られ、「自分事」とすることが困難になってしまった。そのため、誰もが10分程度で書き込める内容とし、ワークシートの色使いや文言も可能な限りやわらかいものになるよう工夫した。

図4. 「みんなで考えよう『育てたい力』」シート



【演習の様子】

イ ワークシート「学びをつなげ、広がる単元構想」～「育てたい力」に向けてつながる学び～

カリキュラム・マネジメントを授業づくりや学級づくりに活用し、全ての教職員にとって「自分事」とするためには、単元構想や1時間単位の授業構想の演習を行い、実感することが効果的である。

図5はカリキュラム・マネジメントの三つの側面にある「教科等横断的な学習活動の編成」、「学校内外の資源の活用」を単元構想に組み込むために設計したワークシートである。

最も重要な点は「単元で育成を目指す資質・能力」を検討するところである。学校教育目標や重点目標である「育てたい力」を意識するあまり、単元のねらいがおざなりになってしまうことがある。そこで、本ワークシートでは単元のねらいと「育てたい力」をつないだ「単元で育成を目指す資質・能力」を検討することから始める。これによって、単元のねらいと「育てたい力」を無理なくつなぐことができる。

そして工夫・手立てを検討し、横断的につながる学びや学校内外の資源の活用について考えることで単元構想にカリキュラム・マネジメントの視点を組み込むことができる。

一方でカリキュラム・マネジメントの三つの側面にある「PDCAサイクルの確立」については「成果・活用の手立て」、「課題・活用の手立て」として簡単にまとめるに留めた。学習活動における評価・改善は不断に行われている営みであり、各学校にそれぞれの評価・改善システムがあるため、本ワークシートでは簡単なメモで十分と判断したためである。

開発したワークシートを用いた出前講座は実践的な内容で高い評価を得ることができた。(図6)特に目標設定の演習は評価が高く、出前講座の後、そのまま学年会議や教科会議などを行い、研修の学びを即座に活用する姿が見られるなど、効果の高い研修となった。

ワークシートについても「学校で継続的に活用したい」といった声が聞かれ、一定の効果が確認された。

3 学びをつなげ、広げる単元構想シート

単元名

単元のねらい

「育てたい力」

単元で育成を目指す資質・能力

工夫・手立て

つながる学習

成果・活用の手立て

課題・活用の手立て

図5.「学びをつなげ、広げる単元構想」シート

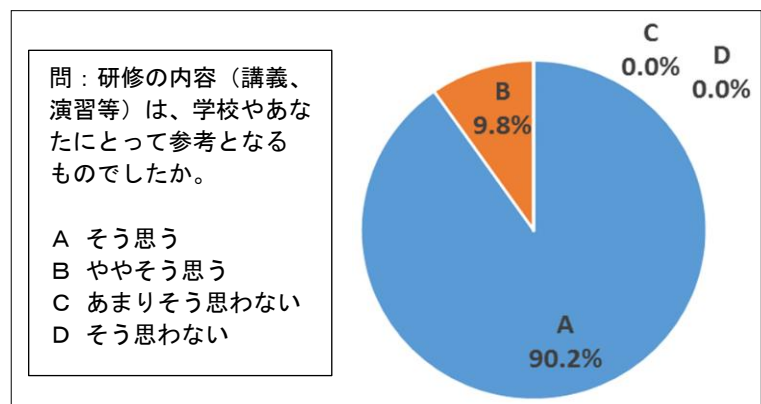


図6. 令和元年度出前講座
「カリキュラム・マネジメント講座」アンケート結果

(4) 「豊かな学びをつなぐカリキュラム・マネジメントハンドブック」の作成

本研究の成果を府の内外に発信するため、出前講座の講義内容、演習で用いたワークシート、実践例をまとめ、「豊かな学びをつなぐカリキュラム・マネジメントハンドブック」を作成した。

内容の方向性はワークシート同様、先に述べたカリキュラム・マネジメント実現の3つの課題に対応したものであり、かつ、校内研修や日々の実践の構想に活用しやすい内容とした上で、見開きでページを構成し、デザインを読みやすく工夫した。

本項では本ハンドブックの主な内容や特徴について述べることにする。

「豊かな学びをつなぐカリキュラム・マネジメントハンドブック」掲載内容

- 1 全教職員で児童生徒の学びを豊かにつなぐ～ハンドブックのねらい～
- 2 カリキュラム・マネジメントの「3つの問い」
 - ・カリキュラム・マネジメントとは何か？
 - ・なぜカリキュラム・マネジメントが必要なのか？
 - ・誰がカリキュラム・マネジメントに取り組むのか？
- 3 4つのステップで取り組むカリキュラム・マネジメント
 - ・実態の把握と共有
 - ・重点目標の設定
 - ・教育課程の編成
 - ・実施・評価・改善
- 4 ワーク1：みんなで考えよう「育てたい力」～実態把握と共有を目標設定につなげる～
 - ・ワークシート「みんなで考えよう『育てたい力』」
 - ・コラム「教えて！センタ君♪～効果的な実態把握・共有～」
- 5 ワーク2：学びを俯瞰する単元配列表～「育てたい力」と「学習内容」でつなぐ学び～
 - ・ワークシート「学びを俯瞰する単元配列表」
- 6 ワーク3：学びをつなげ、広げる単元構想～「育てたい力」に向けてつながる学び～
 - ・ワークシート「学びをつなげ、広げる単元構想」
 - ・コラム「教えて！センタ君♪～ベクトルをそろえる～」
- 7 ワーク4：学びの効果を高める授業構想～6つの工夫で学びをマネジメント～
 - ・ワークシート「学びの効果を高める授業構想」
 - ・コラム「教えて！センタ君♪～全教職員で取り組む「カリキュラム・マネジメント」～」
- 8 取組のススメ1：成長に見える化する「学級づくりすごろく」～取組をつないで学びの効果を高める～
- 9 取組のススメ2：学びを創造する「9×9シート」～児童生徒が主体的に学びをマネジメント～



①カリキュラム・マネジメントの概要の解説、カリキュラム・マネジメントサイクルの提示

ハンドブックの導入として、出前講座で最も希望が多かったテーマである「カリキュラム・マネジメントの概要」の解説を掲載した。「カリキュラム・マネジメントとは何か?」、「なぜカリキュラム・マネジメントが必要なのか?」、「誰がカリキュラム・マネジメントに取り組むのか?」という「3つの問い」に焦点化し、新学習指導要領の考え方とつなげて解説した。出前講座の受講者が感じていた疑問に対応した内容にすることで、概要をより簡潔にまとめることができた。

また、「学校教育目標を実現するため、教育課程を編成・実施・改善する営み」としてカリキュラム・マネジメントを機能させるために、「実態の把握と共有」、「重点目標の設定」、「教育課程の編成」、「実施・評価・改善」の4つのステップによるカリキュラム・マネジメントサイクルを提示した。さ

らにそれぞれのステップで「SWOT分析」、「SMARTの法則」、「カリキュラム・マネジメントの三つの側面」、「『改革』『改善』二つのループ」を紹介し、より深みのある内容とした。(図7)

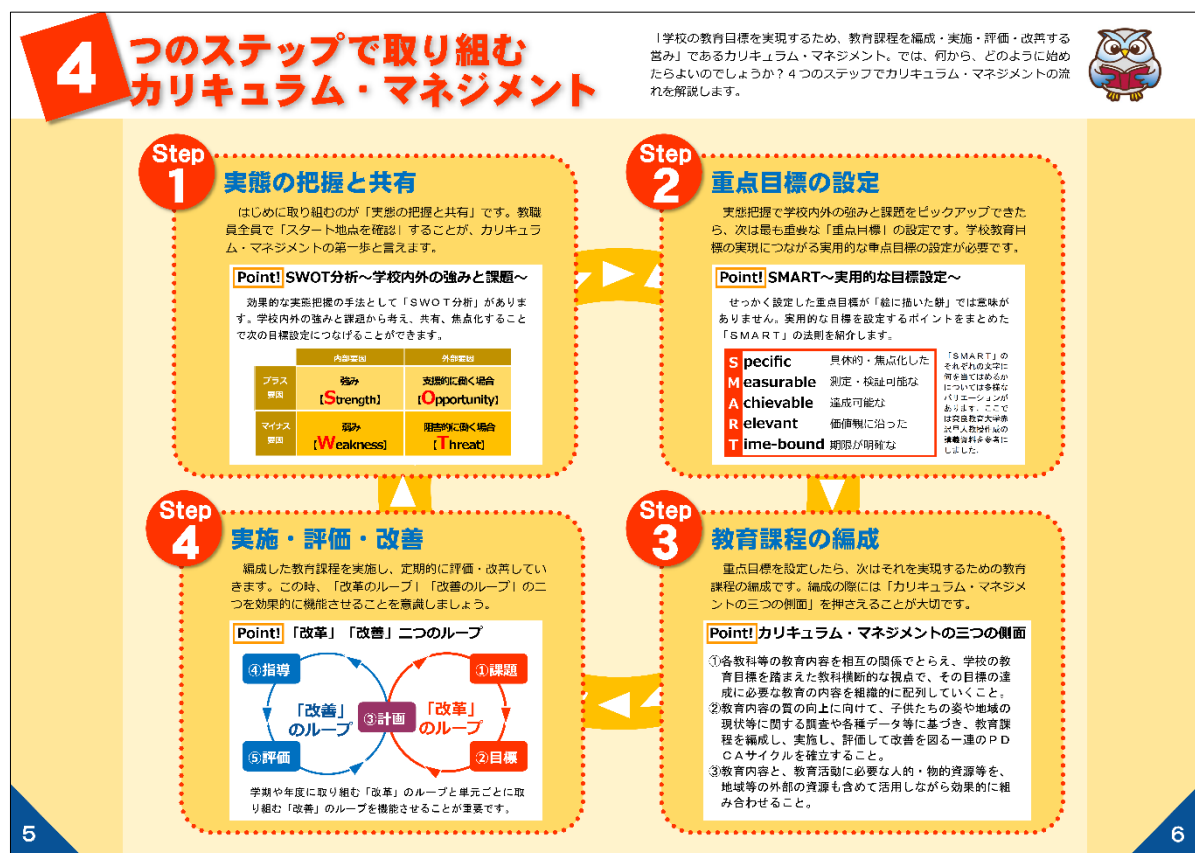


図7. カリキュラム・マネジメントサイクル

②ワークシートの紹介、コラムの掲載

ハンドブックの中心であるワークシートの紹介では、見開き2ページを用いて、ねらいやワークの流れ・注意点の他、記入例や活用方法を掲載した。ワークシートを「書類」ではなく「思考ツール」として活用して欲しいという趣旨から、記入例については、記入箇所に手書きフォントを用いた。

また、コラム「教えて！センタ君♪」では、出前講座で受講者から受けた質問の中から、ワークシートの内容に沿ったものを選び、その質問に答える形で掲載した。「効果的な実態把握・共有」、「ベクトルをそろえる」、「全教職員で取り組む『カリキュラム・マネジメント』」の3つの質問は、導入部の「3つの問い」、「カリキュラム・マネジメントサイクル」を補完する内容であるとともに、カリキュラム・マネジメントに限らず、様々な場面で見られる課題である。この内容をコラムとして、ワークシートの記入例と共に掲載することで情報量を調節するとともに、ワークシート活用のヒントとして扱うことができた。(図8)

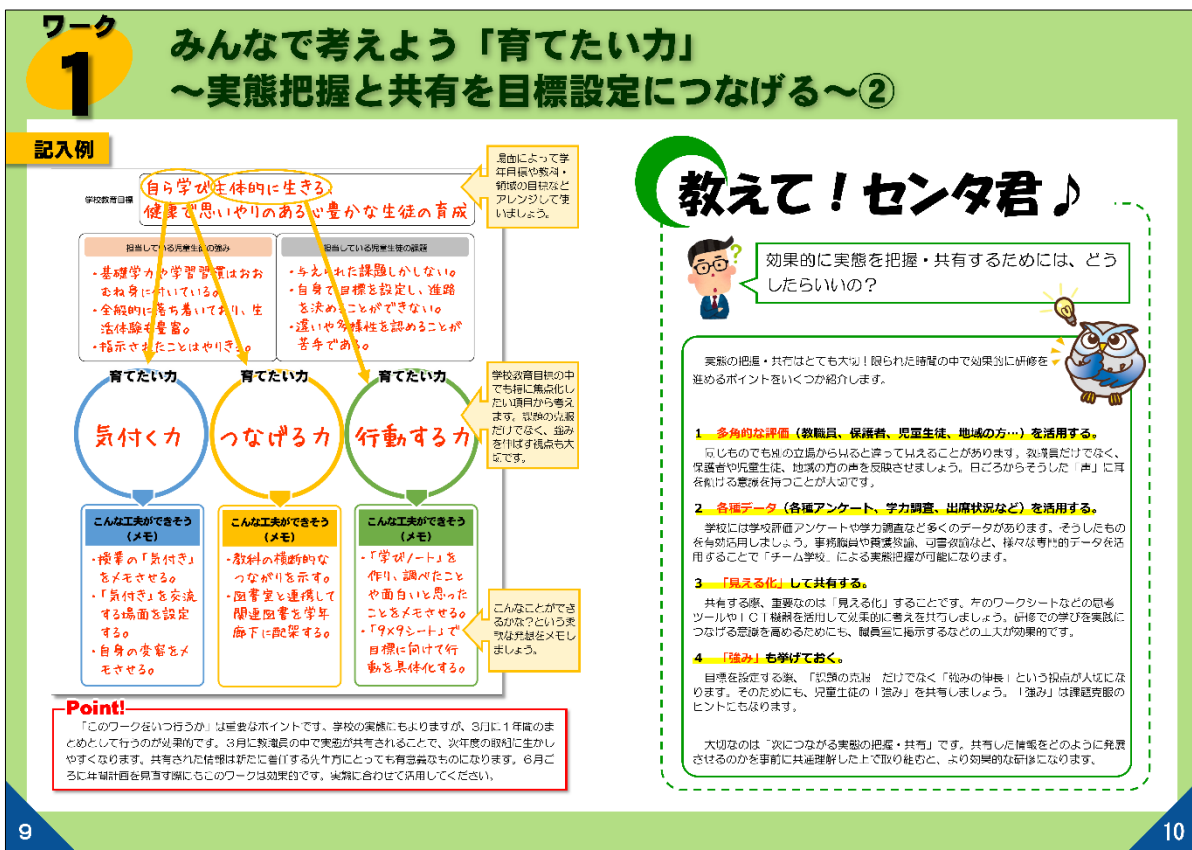


図8. ワークシート記入例及びコラム「教えて! センタ君」

③「取組のススメ」での実践紹介

カリキュラム・マネジメントの重要な目的として「児童生徒が主体者として、自ら学びをマネジメントする力の育成」が挙げられる。出前講座ではその視点を受講者に伝えとともに、児童生徒が主体となる学級づくり、キャリア形成の実践を紹介し、ハンドブックにも同様の実践を掲載した。

ア 「学級づくりすごろく」の実践

学級づくりで紹介する実践は「学級づくりすごろく」である。(図9)「学校行事や特別活動などで学級集団の成長が見られたのに、次につながらず、取組がイベント化してしまう」という課題は出前講座の希望テーマの中にも見られた。多くの教室に掲示されている「学級目標」が教室の背景になってしまい、効果的に機能していない現状も見られる。

この取組は、それらの学級づくりの課題を改善するために「学級集団の成長を見える化する」、「学びの連続性を高める」、「児童生徒自身が学びを評価する」ことがねらいである。すごろくを作成するのは児童生徒である。1年間を見通してそれぞれの取組や学期ごとの目標や評価を児童生徒が考え、すごろくそのものを常に更新し続けることで、学級の1年間の歩みと成長を見える化し、学級の活性化につなげることができる。

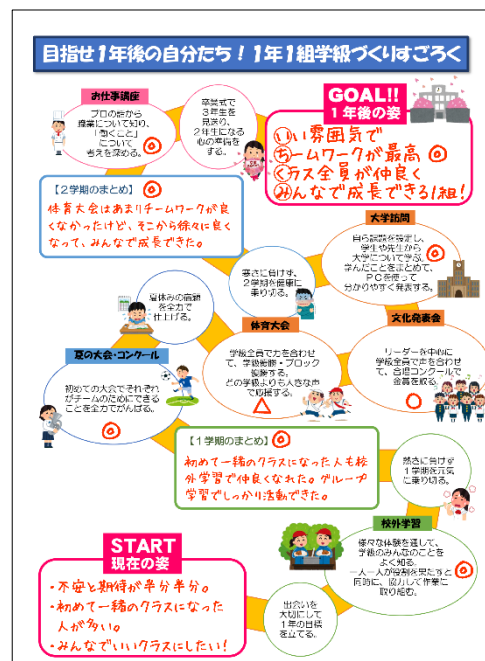


図9. 「学級づくりすごろく」実践例

イ 学びを創造する「9×9シート」の実践

変化の激しい社会を生きる児童生徒が「なりたい自分」を思い描き、生涯にわたって学び続けるための資質・能力を育むことは学校教育の大きな目標の一つだと言える。この取組は「学びの主体者」として主体的に自己の学びをマネジメントする力の育成をねらいとしている。(図10)

児童生徒が自身の大きな目標である「なりたい自分、目指す姿」を想起し、その目標を達成するための8つの目標を設定する。そして、その8つの目標に対して、さらに具体的な8つの目標を設定することで、目標達成への道筋を考え、自分自身で学びを創造する力を養う。担任の先生と面談をしながら、目標について具体化する方法を考えるのも効果的である。

この取組は児童生徒の学びだけでなく、学級づくりにも活用できる非常に汎用性の高い取組だと言える。実際には「9×9」のシートを使用するのは非常に難度が高く、児童生徒の実態に合わせて、「5×5」などに変更して活用する必要がある。



図10. 「9×9シート」実践例

このように出前講座では、主として児童生徒、つまり「学ぶ側」の営みとしてのカリキュラム・マネジメントの具体例を紹介した。また、紹介する事例は「どこかで見たことがある実践」であることを大切にしたい。一般的によく知られている事例を紹介することで「カリキュラム・マネジメントは新しいものではなく、これまでの実践を捉え直すことが重要である」ことを受講者に意識づけるためである。

受講者の感想にも、「今あるものをカリキュラム・マネジメントの視点で活用していきたい」という記述が多く見られ、効果の高い実践紹介であったため「取組のススメ」としてハンドブックに掲載した。

4 今後の展望

カリキュラム・マネジメントはそれのみを単独で語るものではなく、学校づくり、授業づくりなどの文脈の中で、その一要素として語られ、自然に活用されて初めて「機能している」と言える。

今後は「豊かな学びをつなぐカリキュラム・マネジメントハンドブック」を府内各学校、府内図書館、府内大学、全教連加盟機関に送付することで、本研究の成果を発信し、各学校におけるカリキュラム・マネジメント実現の支援につなげたい。また、所内での研修にも活用し、京都府総合教育センターの研修講座及び出前講座に本研究の成果が生かされ、それぞれにカリキュラム・マネジメントの理念が浸透していくよう、引き続き取り組んでいきたい。

<参考文献>

- 村川雅弘 2018『学力向上・授業改善・学校改革 カリマネ 100 の処方』教育開発研究所
- 田村知子・村川雅弘他 2016『カリキュラムマネジメント・ハンドブック』ぎょうせい
- 田村学 2017『カリキュラム・マネジメント入門「深い学び」の授業デザイン。学びをつなぐ7つのミッション。』東洋館出版